基礎看護学実習

実習指導要項

基礎看護学実習Ⅰ

1　実習のねがい

カリキュラム改正に伴い、対象との人間関係を形成するためには、「その基礎となるコミュニケーション能力が求められる」として、強化するよう求められている。この実習では、机上で習うコミュニケーションの基本をもとに、看護専門職として備えるべきコミュニケーションの能力向上へつながるような実習としたい。

「相互に理解しあう」「メッセージを正しく表現する」「適切な伝え方を選択する」ことについて患者や関連する職種・人々の間のコミュニケーションを振り返り、その後へ続く看護へ活かせるとよい。ただ、この間だけで看護専門職として備えるべきコミュニケーションに上達することは難しい。ここでは、その場面を振り返り、今後そこから発展させるための素地が学べればよい。

〈実習目標〉

看護の対象者との関わりを通し、自己の傾向を知り、看護におけるコミュニケーションについて体験的に学ぶ。

〈評価規準〉（めざす姿）

1. 患者とのコミュニケーションを振り返り、自己の傾向を知る。
2. 患者の思いを知るために必要なコミュニケーションを知る。
3. グループメンバーと協力して実習に臨んでいる。
4. 情報管理を適切行っている。
5. 礼節のある態度や学び続ける姿勢をもつ。
6. 医療従事者として、医療チームや患者への影響を考え健康管理に努める。

2　実習内容・学習方法と指導方法

学習活動	支援（指導内容）	評価規準	評価資料
患者とのコミュニケーションを振り返り、自己の傾向を知る。	事前調整 ・実習担当教員は学生の状況、入院中の患者の状態等を確認し、実習指導者に実習の目的、方法、指導内容について説明をする。 ・実習指導者は学生を担当する看護師に実習の目的、方法、指導内容について説明する。 プロセスレコードの記述、振り返り、カンファレンスにて患者の思いや自己の言動から傾向について考えられるようにアドバイスを行う。 ・教員は、学生が患者とのコミュニケーションでどんなところに着目しているか、困っていることはどこかを確認し、プロセスレコードの記述指導を行う。	1	実習記録Ⅱ カンファレンスの発言

	・思い出せないことはそのままに記述し、思い出せない理由を率直に表現させる。 ・学生の気になる場面より出されたプロセスレコードの振り返りを行う。 ・患者の言動を学生がどのように感じたか、ありのままを見つめ、学生がその時に感じた気持ちが素直に引き出すように関わる。 ・学生がありのままの自分と向き合えるようにできるだけ否定的な言葉を出さないように注意する。また、患者の思いと学生の思いをよくみつめ、客観視できるよう促す。		
看護に必要な患者とのコミュニケーションについて表現する。	看護に必要なコミュニケーションについて考えられるようにアドバイスを行う。 ・担当看護師は、その日の受けもち患者の概要を説明し、気になる患者との関わり方、患者がどのような思いを持っているかなどを学生に説明する。 ・担当看護師は、学生の目標を確認し、ベッドサイドで学生の紹介を行い、学生が患者と話をする機会を設ける。 ・患者と学生が、話がすすむように話のきっかけを作り、患者の興味関心があることや大切にしていることなどを伝える。 ・担当看護師の援助を見学しながら患者の思いを考えられているか確認する。 ・担当看護師は、学生が患者と関わった際に困ったこと、聞きたいこと、どのように聞いたらいいか等を学生の状況に合わせてアドバイスをする。 ・教員は、患者との関わりで困ったこと、気になることを確認し、そのように感じた理由、患者の思いどのように考えたかなどを問いかけて、学生が自己のコミュニケーションを振り返る手がかりを示唆する。	2	実習記録Ⅰ・Ⅱ カンファレンス、グループワークでの発言 レポート
看護師として倫理規範をもち、行動している。	看護師から学ぶこと、仲間から学びあうことを学生の使命として実習に取り組む姿勢について説明する。 ・学内オリエンテーションの際に情報管理、プライバシー保護について説明を行う。 ・実習記録、メモ帳の取り扱いについて看護学生としての責任ある行動について説明を行う。 ・実習に関することをSNS上へ載せないことを注意喚起する。 ・学内、学外で情報漏洩しない行動ができているか確認する。 ・病棟オリエンテーション時に実習指導者より、情報管理の徹底を伝える。 ・学生の言葉遣い、行動等で気になることがあれば、なぜそれが今そぐわないのか理由を伝えながら注意を促す。	4 5 6	実習関係者とのやりとりの状況 カンファレンス、グループワークの運営 身だしなみ 言葉遣い・態度 記録提出の状況 実習記録Ⅰ

	自分の体調管理による周囲への影響を考え感染予防に努めた行動ができているか確認する。 ・毎日の体調の報告、連絡、相談の重要性について説明する。 ・毎日の体調を把握する ・グループ内で体調確認ができるように促す。		健康状態 報告連絡相談

静岡市立清水看護専門学校　基礎看護学実習Ⅰ評価表　　「看護の対象者との関わりを通し、対人関係の基礎を学ぶ」

学籍番号（　　）　氏名（　　）

学習活動	具体的な評価規準	目標との関連	評価資料	評価基準 すばらしい	よい	歩努力を要する
患者とのコミュニケーションを振り返り、自己の傾向を知る。	患者とのコミュニケーションを振り返り、自己の傾向を客観視している。	1	実習記録Ⅱ カンファレンスの発言	態度・傾聴・伝え方などの視点からコミュニケーションの取り方を振り返り、自己の傾向を表現できている。　３０	態度・傾聴・伝え方などの視点からコミュニケーションの取り方の振り返りができている。　２５	コミュニケーション場面を挙げることができている。　5
看護に必要な患者とのコミュニケーションについて表現する。	相手を尊重した関わりを具体的に表現している。	１．２	実習記録Ⅰ・Ⅱ カンファレンスの発言 レポート	患者と看護師の関わり、自己の患者との関わりから、患者の思いを尊重するとはどういうことか具体的に表現できている。　３０	患者との思いを知るために必要な関わりを工夫し、患者の思いが表現できている。　２０	患者にあわせて話ができている。 看護師と患者の関わりが表現できている。　5
グループ内で協力しあう。	グループメンバーと協力して実習に臨んでいる。	3	実習関係者、グループメンバーとのやりとりの状況	グループの一員としてお互いに助言をしあい、リーダーやメンバーとしての役割ができている。１０	グループの一員として他のメンバーと協力し、実習できている。　8	他者より求められグループメンバーへの意見や役割ができている。　5
看護者としての倫理的規範を持ち、行動している。	情報管理を適切に行っている。	4	情報管理の状況 報告連絡相談の状況	個人情報の保護のため、記録の取り扱い、会話の場所など情報漏洩しない行動ができている。　１０	情報の取り扱いに不備があることに気づき、すぐに対処行動ができている。　8	情報の取り扱いについて不適切な状況、周囲への影響を考えることができない。　1
	礼節のある態度や学び続ける姿勢が見られている。	5	身だしなみ・態度・言葉遣い 実習記録Ⅰ 記録の提出状況	適切な身だしなみ・態度・言葉遣いで礼節のある態度の意味を理解し行動している。わからないことは自ら調べ、アドバイスをもらい積極的に実習できている。　１０	指導の意味を理解し、適切な身だしなみ・態度・言葉遣いについて行動を変えることができている。わからないことはアドバイスを受け、調べる・相談できる行動ができている。　8	適切な身だしなみ・態度・言葉遣いについて指導を受けたが行動を変えることができていない。わからないことはアドバイスを受けて調べる、相談する行動ができていない。 決められた記録を提出していない1
	医療従事者として、医療チームや患者への影響を考え健康管理に努めている。	6	健康状態 報告連絡相談の状況	自分の体調管理による周囲への影響を考え感染予防に努めた行動をしている。　１０	体調管理についてとるべき行動について指導を受けそれに従っている。　5	体調管理に影響する約束事を守れていない。　1

指導者助言	欠課時間	自己評価	実習評価
指導者サイン（　　）	時間		

基礎看護学実習Ⅱ

1　実習のねがい

看護の実践をするための方法論として看護過程がある。看護過程には５つの構成要素があり、アセスメント・看護問題の明確化、計画立案、実施、評価である。なぜ看護過程を重視するかというと、多方面から情報を収集、問題抽出、個別の計画立案を行いたいからである。このステップは５つの構成要素を進めることで表現されて実践できる形になる。しかし、入院期間の短縮などからそのステップを十分吟味しながら進行することが困難となっている。

看護過程を支える思考として、クリティカルシンキングがある。これは、事実に基づく偏りのない思考、一つのことを広くとらえ問題解決や判断に活用することなどである。基礎看護学実習Ⅱでは、限られた期間の中で、看護過程の思考が育つよう、事実との因果関係、認識している事象の信頼性、正確性、根拠の探求、などを学べるよう教授したい。

限られた時間の中の学習支援として、実施すべき看護行為や判断結果だけでなく、看護実践するまでの考え方をするために必要な知識をどのようにつかっているのか話して聞かせる時間をとり、看護実践力が育つよう協力をお願いしたい。

〈実習目標〉

1　現象の因果関係や予測できることについて論理的に説明できる。
2　日常生活援助の経験を通し患者のねがう生活の実現と関連付けることができる。
3　患者の権利を考え最良の方法で実施できるよう指導者やチームメンバーの助言をうけることができる。

〈評価規準〉（めざす姿）

1　日常生活援助を自ら考えた方法や指導者の考えている方法を共有しながら指導者とともに実施している。
2　患者の状態を示すデータを複数あげて情報収集している。
3　データの因果関係の説明を日々更新される情報を用い実施している。
4　日常生活援助の実施内容と患者の願いの実現について論理的に説明できる。

2　実習内容・学習方法と指導方法

学習活動	支援（指導方法）	評価規準	評価資料
指導者と共に日常生活援助を実施する。	（実習１日目） ・担当教員・実習指導者で学生の状況を確認しながら患者を選択する。教員は学生の状況、実習指導者は患者の状況を把握して患者を選択する。 ・実習１日目のオリエンテーションで患者について紹介し、学生が患者と出会え、挨拶	1	実習記録Ⅲ・Ⅳ 面接

指導者と共に日常生活援助を実施する。	ができるよう調整する。 ・実習指導者は学生に患者の病名等基本的な情報提供と機能障害・看護問題・日常生活力のアセスメントが行えるよう患者について紹介する。 ・情報収集の媒体となりうる電子カルテやそのほかのツールや多職種のカンファレンスの参加方などについて説明する。 ・病棟で行われる看護の中で看護師教育の技術項目にあたるものが体験できるよう具体的な内容を示し、学生が体験できるよう調整する。 ・翌日から学生が困らないように病棟のスケジュール・勤務体制・看護体制・指導体制・物品の扱い・感染予防の方法・災害時の行動について説明する。 ・担当教員は、学生のオリエンテーションの参加状況を把握し、フォローする。 （実習２日目以降） ・指導者は学生が患者とどのように関わろうとしているのか、具体的に把握する。 ・看護師が実施する患者の生活援助を学生と共に行いケアの必要性について説明する。 ・看護援助では看護師の援助を見学のみか、学生主体で指導者がフォローする、見守りをするかの判断を行い、学生が看護援助を行えるよう関わる。 ・フィジカルアセスメントの結果や実施した援助についてありのまま報告しているか確認し、患者に適切な援助であったか振り返りを行う。		
様々な手段を用いて情報収集をする。	・指導者は検温場面を見せ、患者に必要な検温や観察項目の視点について説明する。 ・学生が患者とコミュニケーションがとれているかどうかを確認し、困難な場合は介入する。 ・コミュニケーションの場面では、担当看護師の意図、患者の重要な発言について意識できるよう場面を共有する。 ・指導者は学生が実施するフィジカルアセスメント技術の手技が確実かどうかを確認する。（血圧測定についてはダブルチェックを行い、適切な測定値であれば単独で行うよう促す。） ・指導者は学生の患者理解の状況を記録・報告・相談・ミーティング・面接を通して把握し、状況に応じ情報提供や学習を手助けする。特に、学生が、状況の把握を正しくできるよう、学生のとらえ方を確認しながら、看護師としての把握、判断・予測を説明する。１日の実習計画について時間を調整し、学生の相談にのる。学生が気付きから看護を考えられるように、情報提供や助言を行う。 ・学生がなぜその計画を立案してきたのか学生の注目している患者の状況や・気付きを把握し、それらが深められるよう助言を行う。そのうえで実践者として今注目している状況やチーム	２	データの内容・数・関連性の説明 発言内容 面接

	で優先しているケアの内容について情報提供し、学生が一緒に関われるように調整する。		
看護問題を挙げる。	・教員は学生が情報分析に必要なことを意図的に得られているか確認する。その際、ひとつひとつの（呼吸・循環など）枠にこだわらず、いろいろな視点から総合して情報がとれるよう必要に応じ以下の視点から助言する。 ・教員は生理機能の知識を活用しながら、基本的欲求を分析するよう促す。基本的欲求の未充足によりどのような影響が生じるか、系統的にかつ、体力・知識・意識力の視点から全体的に患者を捉えていけるよう助言する。 ・看護援助の必要性について、苦痛・生活障害・生命危機・心理社会の視点を活用できるよう助言する。記述にこだわらず、口頭試問など学生の表現しやすい方法で理解につなげる。 ・指導者は患者等の何に注目し、判断して実施するようにしているか、エピドードを用いながら実践内容を学生に伝えられるよう、時間を調整する。特に、受けもち当初と注目している情報の変化はあるか確認し、タイムリーなデータや患者の言動に注目できるよう看護師としての注目している情報を説明する。 ・指導者は援助の前・中・後にどんな点を観察すべきか伝えながら学生の理解を確認する。 ・指導者は看護師としての優先順位、その理由などを学生の理解度に応じ説明する。 ・指導者は記録・報告・相談・ミーティング・面接から患者理解の程度を把握し、学生が、新たな気付きや知識とケアの関連性について結びつくよう助言を行う。	3	実習記録ⅢⅣⅤ 自己学習ノート 面接 ミーティングの議題提示・発言内容
患者のねがいを実現するための道筋を全体像に整理する	・指導者はケア実施後はケアについて振り返る時間を持ち、患者の反応から目標が評価できるよう助言する。 ・指導者は学生が５Ｗ１Ｈで振り返っているか確認する。学生が、目標としたこととどのように関連しているのか、患者にとってそのかかわりがどのような意味があるのか、学生の表現している内容を把握して助言を行う。自分であればどう考えるか、どのような知識を使ってそう考えたかを話す。 ・看護チームの方針や多職種との協働目標を学生がとらえられるように、各々のカンファレンスへの参加やその結果について学生に情報提示を行い、学生が状況を把握しやすいようにする。 ・教員は学生が実施をどのように振り返っているか確認し、患者がどのように反応しているのか目標と照らし合わせて考えられるようにする。	4	実習記録Ⅴ カンファレンスの参加状況

※指導者とは、実習指導者・実習にかかわる看護師・担当教員を指す。

３．全体的な指導事項

・教員は、個人情報の取り扱い・医療従事者になるものとしての心構えについて実習初日までに基礎実習の学びを想起させる。

・実習指導者は、看護師として基本的な行動についてオリエンテーションで注意を促す。

・指導者は必要に応じ、学生が判断して行動できるよう、相談にのる。グループで考えることが学生の学びになることについては学生から提示ができるよう関わる。

・実習５日目、週末、患者変更時など学生が自己評価を付けてきた内容を確認しながら、教員がみている状況と照らし合わせながら良い方向に向かっていくよう助言をする。担当教員は該当する項目に青ペンで日付を入れる。

・最終評価は該当する項目に青ペンで〇をつけ、総合点を出し、学生に返却する。実習最終日あたりで、どの程度の実習目標に対する達成状況にあるか学生と確認しておく。実習終了の段階で学生が今現在の達成状況や課題が見いだせるよう関わる。

静岡市立清水看護専門学校　基礎看護学実習Ⅱ評価表　　学籍番号　　氏名

目的　患者とその周囲の事象を様々な角度から理解し、看護師として予測する力を養う。

目標：1 現象の因果関係や予測できることについて論理的に説明できる。（気づく力）

2 日常生活援助を看護師と一緒に実施する体験を積み重ね、患者の願う生活の実現と関連づけることができる。（考える力）

3 患者の権利を考え最良の方法で実施できるよう指導者やチームメンバーの助言をうけることができる。（行動する力）

R5.6.13

学習活動	評価規準	目標との関連	評価資料	評価基準 すばらしい	評価基準 よい	評価基準 努力を要する
指導者と共に安全・安楽に日常生活援助を実施する。	自ら考えた方法や指導者の考えた方法を共有しながら一緒に実施している。	２・３	指導者との相談内容 実習記録Ⅲ・Ⅳ 指導者への報告・相談・連絡状況	自分の考えた方法を指導者と共有し、助言をもらいながら自分の考えと、助言内容の理由を区別をつけて表現している。 また、安全・安楽を踏まえた日常生活援助を指導者と共に実施している。　２０	なぜその援助を必要としているか指導者と話す中で自分の考えをまとめている。 また、安全・安楽を踏まえた援助を実施している。　１５	指導者の考えに基づいて実施し、指導者の考えをそのまま記述しており、自分の考えた内容と区別して表現していない。 また、安全・安楽を踏まえた援助を実施していない。　3
様々な手段を用いて情報収集を行う。	患者の状態を示すデータを複数あげている。	1	データーの内容、数 関連性の説明 実習記録Ⅳ 自己学習ノート	カルテ・指導者・フィジカルイグザミネーションにより得たタイムリーな複数のデータが患者の状態と関連していることを表現している。　２０	カルテ・指導者・フィジカルアセスメントにより得た複数のデータが患者の状態に関連していることを表現している。　１５	情報収集したデータが不足しており、かつ患者の状態と関連させることが不十分である。　3
看護問題をあげる。	データの因果関係の説明を積み重ねている。	1	実習記録Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 面接 ミーティングの議題 提示と発言内容 自己学習ノート	看護問題が生活や人生に与える影響や問題が解決されないときの予測を過去・現在・未来のつながりをもち、調べた専門的知識を使って説明している。　２０	看護問題が生活や人生に与える影響や問題が解決されないときの予測を調べた専門的な知識を使って説明している。　１５	看護問題が生活や人生に与える影響や問題が解決されないときの予測が主観的である。　5
患者のねがいを実現するための道筋を全体像に整理する。	日常生活援助の実践がねがいの実現に向けていくことを理論立てて説明できる。	１・２ 3	実習記録Ⅴ（全体像） 最終日カンファレンスの参加状況とその資料	患者とのエピソードや看護場面が看護問題や日常生活援助とどのようにつながっているのか、どのようにしたらねがう姿になるのか関連させて説明している。　２０	日常生活の援助を通してなぜその援助を必要としているのか事象の原因と照らし合わせて説明している。　１０	毎日の実習開始までに目標・計画立案や実習記録の追加・修正をすることが難しく、全体像に学びを整理することが不十分である。　5
対象の立場になって考え行動につなげる。	知り得た情報の管理ができる。	3	記録用紙の管理 メモ帳の管理 患者との関り 学校外での言動	情報を記載した記録物の管理や会話に気をつけプライバシーを守っている。　6		情報管理ができていない。　0
	看護学生として良識やマナーの必要性を理解し、患者の権利を考えた行動をしている。	3	時間管理・体調管理・言葉遣い・態度・身だしなみ 実習準備状況	自らの行動を振り返り看護学生として良識やマナーの必要性を理解し、患者の権利を考えた行動をしている。　8	看護学生として良識やマナーを踏まえた行動をしている。　5	看護学生として良識やマナーを考えた行動がとれていない。　0
	対象の状況や思いに沿った行動がとれている。	２・３	患者との関り 面接	患者の状況や言動を踏まえ、どのような思いでいるのか考えた行動ができる。　6	患者の状況や言動を踏まえどのような思いでいるのか考えている。　4	患者の思いを考えていない。　0

指導者の助言

指導者（　　）

教員　（　　）

中間評価／教員：　　学生：

最終評価／教員：　　学生：

基礎看護学実習Ⅲ

１　実習のねがい

看護の実践をするための方法論として看護過程がある。看護過程には５つの構成要素があり、アセスメント・看護問題の明確化、改革立案、実施、評価である。この思考を回すのに必要は思考方法のひとつにクリティカルシンキングがある。看護過程のステップを進めばクリティカルシンキングになるが、入院期間の短縮などからそのステップを十分吟味しながら進行することが困難となっている。そこで基礎看護学実習Ⅱでは、関連、事実の信頼性、正確性、根拠の探求、などを学習している。

看護実践は必ずしもこの思考の過程の手順通りに進むばかりではない。行為が先行していることも多くある。その行為は無意味に行われているのではなく、こころの動くありようであり、現場の複雑で不確実な状況の中で対応している姿である。この積み重ねが、実践知を生み出し、知識として内在化したものを獲得して柔軟な対応ができるようになる。その実践知を獲得していく思考のひとつにリフレクションがある。これを基礎看護学実習Ⅲで学習し、知と実践が関連させ、看護実践力がつくよう教授していきたい。

〈実習目標〉

１　より良い看護を追求する目的で、実習中のできごとについて　省察することができる。
２　看護を実施した結果について次の行動につながるよう評価することができる。
３　看護師らしく考えることができるよう互いに意見を求める、助言をすることができる。

〈評価規準〉（めざす姿）

１　手順をふみ、記述と自分の感情の記述の両方が表現できる。
２　医療者としての優先順位や患者・家族の気持ちなどさまざまな立場を理解したうえで看護師としての考えを表現することができる。
３　患者によりよい看護をするための知識を整理することができる。
４　実施した結果について患者によりよい看護をする目的で評価することができる

２　実習内容・学習方法と指導方法

学習活動と指導者の具体的な行動	支援（指導方法）	評価規準	評価資料
疑問や気がかりになっていることをリフレクションノートに記述する。	・実習オリエンテーションをする ・学生が患者と出会えるよう設定する ・学生の患者理解の程度の把握とその状況に応じた情報提供、助言を行う。 ・患者の観察が行えるように関わる。	1	基礎看護学実習 実習記録ⅢⅥ 面接

疑問や気がかりになっていることをリフレクションノートに記述する。	・指導者が行う患者の生活援助の実際を学生と一緒に行い、そのケアの必要性について学生に説明する。 ・指導者は学生が患者とかかわった内容について報告を聞く。５Ｗ１Ｈの視点で発言しているか注意して聞く。学生の発言が、事実のみであれば、その時の患者の思いや学生自身の思いについて意識できるよう発言を促す。 ・表現は、自分の感情　自分の感情の変化、事実の状況が聴き手、読み手に伝わるように促す。 ・指導者は、初回学生の検温場面を見守り患者に必要な検温や観察項目の視点を確認し必要時補足する。 ・コミュニケーションの場面では担当看護師の意図、患者の重要な発言について意識できるよう場面を共有する。 ・指導者は、学生の患者理解の状況を記録・報告・相談・ミーティング・面接を通して把握し、状況に応じ情報提供や学習を手助けする。 ・指導者は１日の実習計画について時間を調整し、学生の相談にのる。 ・初期段階では学生が気づきから看護を考えられるように情報提供や助言を行う。学生がなぜその計画を立案してきたのか、学生の注目している患者の状況や・気づきを把握し、チームで優先しているケアの内容について情報提供しながら助言を行う。 ・患者の全体像が見えてきた段階では、学生が看護問題を考えていくので、実践者として今注目している状況や、チームで抱えている問題の情報提供もしながら学生に助言する。 ・問題発表以降は、行動計画が問題を解決するための具体策になっているか確認する。 ・教員は分析に必要な情報を意図的に得られているか確認する。生理機能の知識を活用しながら、基本的欲求を分析するよう促す。基本的欲求の未充足によりどのような影響が生じるか、系統的にかつ、体力・知識・意志力の視点から全体的に患者をとらえていけるよう助言する。援助の必要性について、苦痛・生活障害・生命危機・心理社会の視点で活用できるよう助言する。記述のみでなく、口頭試問など学生の表現しやすい方法で理解につなげる。		
実習中の気がかりな出来事ににについて倫理の原則と照らし合わせて、カンファレンスで話し合いをする。	・受けもち患者に関係するチームカンファレンス、多職種との連携内容について情報提供や説明をする。 ・カンファレンスは30分程度で集中して話し合えるよう、会場を提供する。 ・学生の発言が自主的に話しやすい場であるよう立ち位置を工夫する。	2	カンファレンスの議題提示 発言内容 実習記録ⅢⅥ

	・カンファレンスで学生が気になる事象について看護の倫理原則に基づいて話す内容について看護師としての考え、看護チームとしての方針、見解を助言として話す ・学生の発言が学生個への非難、指摘となっているときは、原則に戻り、アサーティブな発言、私はどうとらえる、どう感じた、という発言に変えるよう助言する。 ・記録媒体が準備できる場合できない場合も臨機応変にカンファレンスが開けるよう学生の相談にのる。 ・実施した援助についについて報告させ、助言を行う。フィジカルアセスメントの結果や実践したケアの実施内容をありのまま報告できているか確認する。 ・教員は学生が翌日のスケジュール（目標・行動計画・援助計画）を考えるうえで助言が必要な時は相談にのる。		
実施に使用した知識、より良い実施をするために活用する知識を挙げる。	・実習指導者は必要に応じ、学生が判断して行動できるよう、相談にのる。グループで考えることが学生の学びになることについては学生から提示ができるよう関わる。 ・教員と指導者は、学生の実習状況について情報共有や相談を持ち学生の行動変容につながる指導方略を共有し関わる。 ・指導者は学生が 5W1H で振り返っているか確認する。学生が目標にしたことと、どのように関連しているのか、患者にとってそのかかわりにどのような意味があるのか、学生が考える、発言できるよう促す。 ・学生が挙げる根拠についてのよい、不足を明確に伝える。不足する場合は、次に持ち越さず、私であればどのような知識をつかってどのようなことを考えるのか話す。 ・教員は、学生が実施をどのように振り返っているか確認し、患者がどのように反応しているのか目標と照らし合わせて考えられるようにする。	3	自己学習ノート 実習記録ⅤⅥ 面接
実施した結果より次の実践にむけての取り組みを挙げる	・学生が自ら学習できる、行動をとれるよう、意識できるように関わる。 ・次へつながる実施内容について具体的な内容で挙げられているか確認する。内容の根拠を確認する。 ・指導者は、既習の学習内容が結び付けられるように支援する、新たな知識が必要な場合は参考資料、参考になる情報を提供する。 ・実習担当教員は、実習初日までに医療従事者になるものとしての心構えについて、患者さんへの接し方、情報管理、健康管理など、責任を持ち行動できるように準備する。	4	実習記録ⅢⅥⅦ

３．全体的な指導事項

・実習１日目のオリエンテーションで患者について説明し、学生が患者と出会え、挨拶ができるよう調整する。
・病棟指導者より、病棟の特徴（職員構成、看護体制、病棟のスケジュール）、物品の取り扱い、病棟の構造、災害時の行動法、災害時の行動について説明し、学生が翌日から行動できるようにする。
・情報収集の媒体となりうる電子カルテやそのほかのツールや他職種のカンファレンスの参加方などについて説明する。
・担当教員・実習指導者で学生の状況を確認しながら患者を選択しておく。教員は学生の状況・実習指導者は患者の状況を把握して患者を選択する。
・実習指導者は、学生に患者の病名等基本的な情報提供と機能障害・日常生活力のアセスメントが行えるよう患者について紹介する。
・担当教員は、学生のオリエンテーション参加状況を把握し、フォローする。
・実習５日目に学生が自己評価をつけるので、内容を確認しながら教員がみている状況と照らし合わせながら良い方向に向かっていくように助言をする。担当教員は該当する項目に青ペンで日付を入れる。
・最終評価は該当する項目に青ペンで〇をつけ、総合点を出し、学生に返却する。実習最終日あたりでどの程度の実習目標に対する達成状況にあるか学生と確認しておく。実習終了の段階で学生が今現在の達成状況や課題が見いだせるように関わる。

静岡市立清水看護専門学校　基礎看護学実習Ⅲ　評価表　　学籍番号　　氏名

実習目的　実施内容をリフレクティブに振り返ることで、知識を得る体験を積み重ねる。

実習目標　１　より良い看護を追求する目的で実習中の出来事について省察することができる。（考える力）

２　看護を実施した結果について次へつながるよう評価することができる。（行動する力）

３　看護師らしく考えることができるよう互いに助言を求める、助言をすることができる。（気づく力）

	学習活動	評価規準	目標との関連	評価資料	評価基準		
					すばらしい	よい	努力を要する
1	疑問や気がかりになっていることをリフレクションシートに記述する。	状況の記述では学生と対象の両方の感情や言動が表現できる。	1	基礎看護学実習Ⅲ 実習記録Ⅱ記述内容 面接	状況の記述では、自己と対象の両方の状況があり、自己の感情とその理由について説明されている。　２５	状況の記述では対象の言動と自己の言動・思いが記述されているが偏りがある。　１５	状況の記述では自己の言動や思いのみ記述されている。　１０
2	実習中の気がかりな出来事ににについて倫理の原則と照らし合わせて分析している。またカンファレンスでも話し合いをしている。	医療者としての優先順位や患者・家族の気持ちなどさまざまな立場を理解したうえで看護師としての考えを表現することができる。	1.3	基礎看護書き実習Ⅲ　実習記録Ⅱ カンファレンスの議題提示・発言内容	倫理原則（自律・善行・無害・正義・真実・忠誠・効用）に照らし合わせ自己の気がかりとなった考えを優先順位や様々な立場からリフレクションし行動している。 また、メンバーが前向きに捉えられるように傾聴し承認した行動ができている。　２５	倫理原則に照らし合わせ分析しており、またメンバーが前向きに捉えられるように傾聴し承認した行動ができている。　２０	倫理元素kに照らし合わせた分析が不十分であり、カンファレンスでは気がかりとなった自己の意見のみにとどまっている。　１０
3	実施に使用した知識、より良い実施をするために活用する知識を挙げる。	対象によりよい看護をするための援助の根拠について述べることができる。	1.2	基礎看護学実習Ⅲ 実習記録Ⅱ 面接	対象によりよい看護を実施するための知識を調べ、根拠と結びつけて表現している。　２０	対象によいよい看護を実施するための知識を調べている。　１５	対象によりよい看護を実施するための学習が不足している。　５
4	実施した結果により次の実施にむけての取り組みを挙げる。	実施した結果について対象によりよい看護をする目的で評価することができる。	1.2	基礎看護学実習Ⅲ 実習記録Ⅱ・Ⅲ	実施した内容が対象にとっての意味、影響、ねがう生活と照らし合わせ、考察し表現している。 また、次にどのように取り組むかを具体的に表現している。　１５	実施した内容が対象にとってのねがう生活と照らし合わせ考察し表現している。 また、次にどのように取り組むか表現している　１０	実施内容と次の実践の取り組みのみ表現されている。　５
5	医療者としての情報管理や良識、マナーの必要性を考えた行動をする。	医療者として知り得た情報の管理や良識、マナーの必要性を考えた行動がとれる。	3	記録用紙、メモ帳の管理状態 時間管理、体調管理、言葉遣い、態度、身だしなみ	医療者として情報を記載した記録物等の管理や他者に情報が漏れない行動している。 また、自らの行動を振り返り、良識、マナーの必要性を考えた行動している。　１５	医療者として情報を記載した記録物等の管理や他者に情報が洩れない行動をしている。 自己の至らない良識、マナーについて振り返り、行動を変えている。　１０	情報漏洩に繋がる行動をしている。　０

指導者の助言 指導者（　　）	欠課時間数　　時間
	中間評価／教員：　　学生：
	最終評価／教員：　　学生：